

○尾張定光寺山のヨモギナ (嶋田玄弥, 野呂征男) Haruya SHIMADA & Yukio NORO: *Artemisia lactiflora* Wall. at Jōkōji-san, Owari.

尾張定光寺(愛知県瀬戸市)の参道傍に、大型のヨモギに似た草本が群生しているのが認められた。茎は高さ 1.5~2 m に達し、多数分枝し、10月頃にヨモギに似た白色の頭状花を総状に多数つける。葉は互生し殆んど無毛、羽状に粗に深裂する。全草ヨモギと異なってクマリン様の弱い芳香をもち、乾燥すると著しくなる。水湿を好み林内陰地の水流の附近に多く、匍匐茎を出して繁殖する。また茎の下部から気根を生ずることが多い。この植物は中国原産の *Artemisia lactiflora* Wall. ヨモギナであった。和名は艾菜の意で台湾で葉を食用にするといひ¹⁾、上海附近には野生がみられ²⁾、また渡辺はミツバヨモギの和名を与え、マライで食用あるいは観賞の目的で栽培されるという³⁾。漢名として牧野は甜菜子と称しているが根拠は詳らかでない。現在中国では本植物を四季菜と呼び、また後述の如く右左見は漢薬薯の原植物と考えている⁴⁾。これら漢名については再検討を必要とする。

ヨモギナの本邦への渡来は名古屋の右左見直八が大正11年中国河南省で採集し持帰ったものが最初と思われる。すなわち右左見は大正後期に数回にわたり中国から多数の薬用植物を持帰り、自己の薬園(嘗草園)に栽植すると共に、大正12年から昭和3年まで7回にわたってその多くを定光寺山に移植した記録がある⁴⁾⁵⁾。その中で漢薬薯の原植物としてメドと呼んでいた植物の記載写真がヨモギナと一致する。その後昭和5年に甘菊と共に牧野にも贈られ⁶⁾⁷⁾、また京都薬専を経て京都大学にも植えられた。現在嘗草園は戦災で失われ、また定光寺山の薬園も荒廃し、当時植えられた植物もその殆んどが絶滅し⁸⁾⁹⁾、例外的にシヤクチリソバの如き強靱で野生化したものがかつての面影を残すのみであったが、ここにヨモギナの残存することが確認された次第である。なお京大植物園にもヨモギナの野生化したものがみられる。

終りに種々御助言をたまわった国立衛生試験所春日部薬用植物栽培試験場長 川谷豊彦博士、日本新薬株式会社山科植物研究所長鈴鹿紀博士、京都大学理学部植物学教室村田源氏に謝意を表します。
(名城大学薬学部)

- 1) 牧野富太郎: 牧野新日本植物図鑑 16版 p. 656 (1967) 北隆館, 東京.
- 2) 徐炳声: 上海植物名録 p. 76 (1959) 上海.
- 3) 渡辺清彦: 図説熱帯植物集成 p. 854 (1969) 広川書店, 東京.
- 4) 右左見直八: 嘗草 第6号, p. 38~41 (1929), 同第8号 p. 74~77 (1933).
- 5) 深谷義雄: 愛知県薬業史 p. 57~67 (1965) 名古屋薬業倶楽部, 名古屋.
- 6) 嘗草 第7号 p. 123 (1932).
- 7) 牧野富太郎: 牧野植物一家言 p. 7 (1956) 北隆館, 東京.



Artemisia lactiflora Wall., 尾張定光寺山採集品 (Oct. 18, 1969)